

有島武郎

碁石を

呑んだ

八っちゃん



藍岩堂



碁石を呑んだ八っちゃん



藍岩堂



や
八ちゃんが黒い石も白い石もみんなひとりで両手でとって、股の下に入れてしまおうとするから、僕は怒ってやったんだ。

「八ちゃんそれは僕なんだよ」

といっても、八ちゃんは眼ばかりくりくりさせて、僕の石までひったくりつづけるから、僕は構わずに取りかえしてやった。そうしたら八ちゃんが生意気に僕の頬^{ほっ}ぺたをひっかいた。お母さんがいくら八ちゃんは弟だから可愛がるんだと仰^{おっしや}有ったって、八ちゃんが頬^{ほっ}ぺたをひっかけば僕だって口惜^{くや}しいから僕も力まかせに八ちゃんの小っぽけな鼻の所をひっかいてやった。指の先きが眼にさわった時には、ひっかきながらもちょっと心配だった。ひっかいたらすぐ泣くだろうと思った。そうしたらいい気持ちだろうと思ってひっかいてやった。八ちゃんは泣かないで僕にかかって来た。投げ出していた足を折りまげて尻を浮かして、両手をひっかく形にして、黙ったままでかかって来たから、僕はすきをねらってもう一度八ちゃんの団子鼻の所^{しり}をひっかいてやった。そうしたら八ちゃんは暫^{しばら}く顔中^{かおじゆう}を変ちくりんにしていたが、いきなり尻をどんとついて僕の胸の所がどきんとするような大きな声で泣き出した。

僕はいい気味で、もう一つ八ちゃんの頬^{あしもと}ぺたをなぐりつけておいて、八ちゃんの足許^{あしもと}にころげている碁石^{ごいし}を大急ぎでひったくってやった。そうしたら部屋のむこうに日なたぼっこしながら衣物^{きもの}を縫っていた婆^{ばあ}やが、眼鏡^{めがね}をかけた顔をこちらに向けて、上眼^{うわめ}で睨^{にら}みつけながら、「また泣かせて、兄さん悪いじゃありませんか年かさのくせに」

といったが、八ちゃんが足をばたばたやって死にそうに泣くものだから、いきなり立って来て八ちゃんを抱き上げた。婆^{ばあ}やは八ちゃんにお乳を飲ませているものだから、いつでも八ちゃん^{たれ}の加勢をするんだ。そして、

「おとおお可哀^{かあい}そうに何処^{どこ}を。本当に悪い兄さんですね。あらこんなに眼の下を蚯蚓^{みみず}ばれにして兄さん、御免^{ごめん}なさいと仰^{おっしや}有^あいまし。仰^あ有^あらないとお母さんにいつけますよ。さ」

誰^{たれ}が八ちゃんなんか^{たれ}に御免^{ごめん}なさいするもんか。始めっついでいえば八ちゃんが悪いんだ。僕は黙ったままで婆^{ばあ}やを睨^{にら}みつけてやった。

婆^{ばあ}やはわあわあ泣く八ちゃんの脊中^{こごと}を、抱いたまま平手でそっとたたきながら、八ちゃんをなだめたり、僕に何んだか小言^{こご}をいい続けていたが僕がどうしても詫^{あやま}ってやらなかったら、とうとう

「それじゃよう御座^{ござ}んす。八ちゃんあとで婆^{ばあ}やがお母さんに皆^{みな}ないいつけてあげますからね、もう泣くんじゃありませんよ、いい子ね。八ちゃんは婆^{ばあ}やの御秘蔵^{ごひそう}っ子。兄さんと遊ばずに婆^{ばあ}やのそばにいらっしゃい。いやな兄さんだこと」

といって僕が大急ぎで一^{ひと}かたまりに集めた碁石^{ごいし}の所に手を出して一^{ひとつか}掴^{つか}み掴^{つか}もうとした。僕は^{ふた}大急ぎで両手で蓋^{ふた}をしたけれども、婆^{ばあ}やはかまわずに少しばかり石を拾^{すわ}って婆^{ばあ}やの坐^{すわ}っている所に持って行ってしまった。

普段なら僕は婆^{ばあ}やを追いかけて行って、婆^{ばあ}やが何んといっても、それを取りかえして来るんだけれども、八ちゃんの顔に蚯蚓^{みみず}ばれが出来ていると婆^{ばあ}やのいったのが気がかりで、もしかする

とお母さんにも叱られるだろうと思うと少し位 碁石は取られても我慢する気になった。何しろ八っちゃんよりはずっと沢山こっちに碁石があるんだから、僕は威張っていいと思った。そして部屋の真中に陣どって、その石を黒と白とに分けて畳の上に綺麗にならべ始めた。

八っちゃんは婆やの膝に抱かれながら、まだ口惜しそうに泣きつづけていた。婆やが乳をあてがっても呑もうとしなかった。時々思い出しては大きな声を出した。しまいにはその泣声 少し気になり出して、僕は八っちゃんと喧嘩しなければよかったなあと思い始めた。さっき八っちゃんがにこにこ笑いながら小さな手に碁石を一杯握って、僕が入用ないといったのも僕は思い出した。その小さな握拳が僕の目の前でひょこりひょこりと動いた。

その中に婆やが畳の上に握っていた碁石をばらりと撒くと、泣きじゃくりをしていた八っちゃんは急に泣きやんで、婆やの膝からすべり下りてそれをおもちゃにし始めた。婆やはそれを見ると、

「そうそうそうやっておとなにお遊びなさいよ。婆やは八っちゃんのおちゃんちゃんを急いで縫い上ますからね」

といいながら、せっせと縫物をはじめた。

僕はその時、白い石で兎を、黒い石で亀を作ろうとした。亀の方は出来たけれども、兎の方はあんまり大きく作ったので、片方の耳の先きが足りなかった。もう十ほどあればうまく出来上るんだけど、八っちゃんが持って行ってしまったんだから仕方がない。

「八っちゃん十だけ白い石くれない？」

といおうとしてふっと八っちゃんの方に顔を向けたが、縁側の方を向て碁石をおもちゃにしている八っちゃんを見たら、口をきくのが変になった。今喧嘩したばかりだから、僕から何かいい出してはいけなかった。だから仕方なしに僕は兎をくずしてしまって、もう少し小さく作りなおそうとした。でもそうすると亀の方が大きくなり過ぎて、兎が居眠りしないでも亀の方が駈っこにかち勝そうだった。だから困っちゃった。

僕はどうしても八っちゃんに足らない碁石をくれろといたくなくなった。八っちゃんはまだ三つですぐ忘れるから、そういったら先刻のように丸い握拳だけうんと手を延ばしてくれるかもしれないと思った。

「八っちゃん」

といおうとして僕はその方を見た。

そうしたら八っちゃんは婆やのお尻の所で遊んでいたが真赤な顔になって、眼に一杯涙をためて、口を大きく開いて、手と足とを一生懸命にばたばたと動かしていた。僕は始め 清正公様にいるかったいの乞食がお金をねだる真似をしているのかと思った。それでもあのおしゃべりの八っちゃんが口をきかないのが変だった。おまけに見ていると、両手を口のところにもって行って、無理に口の中に入れようとしたりした。何んだかふざけているのではなく、本気の本気らしくなって来た。しまいには眼を白くしたり黒くしたりして、げえげえと吐きはじめた。

僕は気味が悪くなって来た。八っちゃんが急に怖^こわい病^こ気になったんだと思い出した。僕は大きな声で、

「婆^{どな}や……婆^{どな}や……八っちゃんが病^こ気になったよう」

と怒^{どな}鳴^{どな}ってしまった。そうしたら婆^{どな}やはすぐ自分のお尻^{おしり}の方^{かた}をふり向^むいたが、八っちゃんの肩^{かた}に手をかけて自分の方^{かた}に向けて、急^{あわ}に慌^{あわ}てて後^{うしろ}から八っちゃんを抱^{かか}いて、

「あら八っちゃんどうしたんです。口^{くち}をあけて御^ご覧^{らん}なさい。口^{くち}をですよ。こ^こっちを、明^あい方^{かた}を向^むいて……ああ碁^い石^しを呑^のんだじゃないの」

という^いと、握^{にぎ}り拳^{こぶし}をかためて、八っちゃんの脊^せ中^{ちゆう}を続^つけさ^まにたたきつ^つけた。

「さあ、かーっ^かとい^いって吐^はきなさい……それもう一^い度^ど……どうし^{どう}しよう^{しやう}ねえ……八っちゃん、吐^はくん^{くん}ですよ」

婆^{どな}やは八っちゃんをか^かつきり膝^{ひざ}の上^{うへ}に抱^{かか}き上^あげてまた脊^せ中^{ちゆう}をたたいた。僕はいつ来^きたとも知らぬ中^{ちゆう}に婆^{どな}やの側^{かた}に^うち^ち来て立^たったま^まで八っちゃん^{やち}の顔^{かほ}を見^み下^{くだ}していた。八っちゃん^{やち}の顔^{かほ}は血^ちが^み出る^でほど紅^{あか}くなっていた。婆^{どな}やはどもりながら、

「兄^{あに}さんあなた、早^{はや}くい^いって水^{みづ}を一^い杯^{ぱい}……」

僕は皆^{みな}まで聞^きかずに縁^{えん}側^{かた}に飛^とび出^でして台^{だい}所^{じよ}の方^{かた}に駆^かけて行^いった。水^{みづ}を飲^のませ^せさえすれば八っちゃん^{やち}の病^こ気^きはな^なおるにち^ちが^がい^いないと思^{おも}った。そうしたら婆^{どな}やが後^{うしろ}からまた呼^よびか^かけた。

「兄^{あに}さん水^{みづ}は……早^{はや}くお母^{おと}さん^{さん}の所^{しよ}にい^いって、早^{はや}く来^きて下^{くだ}さいと……」

僕は台^{だい}所^{じよ}の方^{かた}に行^いくのをや^やめて、今^{いま}度は一^い生^{せい}懸^{けん}命^{めい}で^でお茶^{ちや}の間^まの方^{かた}に走^はった。

お母^{おと}さん^{さん}も障^{しょう}子^しを明^あけはな^なして日^ひなたぼ^ぼっこを^をし^しながら静^{しず}かに縫^ぬ物^{ぶつ}をし^していら^らした。その側^{そば}で鉄^{てつ}瓶^{びん}のお湯^{おゆ}が^がい^い音^ねを^をた^たてて煮^にえていた。

僕^{ぼく}にはそ^そこが^がそ^そんなに静^{しず}かな^なのが^が変^{へん}に思^{おも}えた。八っちゃん^{やち}の病^こ気^きはも^もうな^なお^おつて^ている^るの^のか^かも知^しれ^れないと思^{おも}った。け^けれ^れども心^{こゝろ}の中^{ちゆう}は^は駆^かけ^けっこを^をし^して^ている^る時^{とき}見^みたい^いに^にど^どき^きん^んし^して^てい^いて、う^うま^まく口^{くち}が^がき^きけ^けな^なか^かつ^つた。

「お母^{おと}さん……お母^{おと}さん……八っちゃん^{やち}が^がね……こ^こう^うや^やつ^つて^てい^いる^るん^んです^すよ……婆^{どな}や^やが^が早^{はや}く来^きて^て」

とい^いって八っちゃん^{やち}の^のし^した^たと^とお^おり^りの^の真^ま似^ねを^を立^たち^ちな^なが^がら^らし^して^て見^みせ^せた。お母^{おと}さん^{さん}は少^{せう}し^しだ^だる^るそ^そう^うな^な眼^{まなこ}を^をし^して、に^にこ^こに^にこ^こし^しな^なが^がら^ら僕^{ぼく}を^を見^みた^たが、僕^{ぼく}を^を見^みると^と急^まっ^ます^すぐ^ぐに^に二^につ^つに^に折^まつ^つて^てい^いた^た背^せ中^{ちゆう}を^を真^ま直^{ちゆう}にな^なさ^さつ^つた。

「八っちゃん^{やち}が^がど^どう^うか^かした^たの^の」

僕^{ぼく}は一^い生^{せい}懸^{けん}命^{めい}真^ま面^{めん}目^めにな^なつ^つて、

「うん」

と^と思^{おも}い^い切^きり頭^{あたま}を^を前^{まへ}の方^{かた}に^にこ^こく^くり^りと^とや^やつ^つた。

「うん……八っちゃん^{やち}が^がこ^こう^うや^やつ^つて……病^こ気^きにな^なつ^つた^たの^の」

僕^{ぼく}はも^もう一^い度^ど前^{まへ}と^と同^{どう}じ^じ真^ま似^ねを^をし^した。お母^{おと}さん^{さん}は僕^{ぼく}を^を見^みて^てい^いて思^{おも}わ^わず笑^{わら}おう^うとな^なさ^さつ^つた^たが、すぐ^{すぐ}心^{こゝろ}配^{はい}そ^そう^うな^な顔^{かほ}にな^なつ^つて、大^{だい}急^{きゆう}ぎ^ぎで^で頭^{あたま}に^にさ^さし^して^てい^いた^た針^{はり}を^を抜^ぬいて^て針^{はり}さ^さし^しに^にさ^さし^して、慌^{あわ}て^てて^て立^たち^ち上^あつ^つて、前^{まへ}か^かけ^けの^の糸^{いと}く^くず^ずを^を両^{りやう}手^てで^では^はた^たき^きな^なが^がら、僕^{ぼく}の^のあ^あと^とか^から^ら婆^{どな}や^やの^のい^いる^る方^{かた}に^に駆^かけて^ていら^らした。

「婆や……どうしたの」

お母さんは僕を押しつけて、婆やの側に来てこう仰^{おっしゃ}有った。

「八っちゃんがあなただけ……碁石でもお呑^のみになったんでしょうか……」

「お呑^のみになったんでしょうかもないもんじゃないか」

お母さんの声は怒った時の声だった。そしていきなり婆やからひったくるように八っちゃんを抱き取って、自分が苦しくてたまらないような顔をしながら、ばたばた手足を動かしている八っちゃんをよく見ていらした。

「象牙のお箸^{そうげ}を持って参^{はし}りましょうか……それで喉^{のど}を撫^なでますと……」婆やがそういうかいわぬに、

「刺^{とげ}がささったんじゃあるまいし……兄さんあなた早く行って水を持っていらっしやい」

と僕^{ごらん}の方を御覧になった。婆やはそれを聞くと立上ったが、僕は婆やが八っちゃんをそんなにしたように思ったし、用は僕がいつかつたのだから、婆やの走るのをつき抜^{ぬけ}て台所に駈^くけつた。けれども茶碗^{ちawan}を探してそれに水を入れるのは婆やの方が早かった。僕は口惜しくなって婆やにかぶりついた。

「水は僕が持ってくんだい。お母さんは僕に水を……」

「それどころじゃありませんよ」

と婆やは怒ったような声を出して、僕がかかって行くのを茶碗を持っていない方の手で振りはらって、八っちゃんの方にいってしまった。僕は婆やがあんなに力があるとは思わなかった。僕は、

「僕だい僕だい水は僕が持^ゆって行くんだい」

と泣きそうに怒って追っかけたけれども、婆やがそれをお母さんの手に渡すまで婆やに追いつくことが出来なかった。僕は婆やが水をこぼさないでそれほど早く駈^くけられるとは思わなかった。

お母さんは婆やから茶碗を受取ると八っちゃんの口の所にもって行った。半分ほど襟^{えりくび}に水がこぼれたけれども、それでも八っちゃんは水が飲めた。八っちゃんはむせて、苦しがつて、両手で胸の所を引^{ふとこ}かくようにした。懐^{ふね}ろの所に僕がたたんでやった「だまかし船」が半分顔を出していた。僕は八っちゃんが本当に可愛そうであまらなくなった。あんなに苦しめばきっと死ぬにちがいないと思った。死んじゃいけないけれどもきっと死ぬにちがいないと思った。

今まで口惜しがっていた僕は急に悲しくなった。お母さんの顔が真蒼^{まっさお}で、手がぶるぶる震えて、八っちゃんの顔が真紅^{まっか}で、ちっとも八っちゃんの顔みたいでないのを見たら、一人ぼっちになってしまったようで、我慢のしようもなく涙が出た。

お母さんは僕がベソをかき始めたのに気もつかないで、夢中になって八っちゃんの世話をしていなされた。婆やは膝^{ひざ}をついたなりで覗^{のぞ}きこむように、お母さんと八っちゃんの顔とのくつき合っているのを見おろしていた。

その中に八っちゃんが胸にあてがっていた手を放して驚いたような顔をしたと思ったら、いきなりいつもの通りな大きな声を出してわーっと泣き出した。お母さんは夢中になって八っちゃんをだきすくめた。婆やはせきこんで、

「通りましたね、まあよかったこと」

といった。きっと碁石がお腹の中にはいつてしまったのだろう。お母さんも少し安心なされたようだった。僕は泣きながらも、お母さんを見たら、その眼に涙が一杯たまっていた。

その時になってお母さんは急に思い出したように、婆やお医者さんに駈けつけるようにと仰有った。婆やはぴよこぴよこと幾度も頭を下て、^{いくど} ^{さげ} ^{まえだれ}前垂で、顔をふきふき立って行った。

泣きわめいている八っちゃんをあやしなながら、お母さんはきつい眼をして、僕に早く碁石をしまえと仰有った。僕は叱られたような、悪いことをしていたような気がして、大急ぎで、碁石を白も黒もかまわず入れ物にしまってしまった。

八っちゃんは寢床の上にねかされた。どこも痛くはないと見えて、泣くのをよそうとしては、また急に何か思い出したようにわーっと泣き出した。そして、

「さあもういいのよ八っちゃん。どこも痛くはありませんわ。弱いことそんなに泣いちゃあ。かあちゃんがおさすりしてあげますからね、泣くんじゃないの。……あの兄さん」

と僕を見なすったが、僕がしくしくと泣いているのに気がつくつと、
「まあ兄さんも弱虫ね」

といいながらお母さんも泣き出しなされた。それなのに泣くのを僕に隠して泣かないような風をなさるんだ。

「兄さん泣いてなんぞいないで、お坐蒲団をここに一つ持って来て ^{ちようだい}頂戴」

と仰有った。僕はお母さんが泣くので、泣くのを隠すので、なお八っちゃんが死ぬんではないかと心配になってお母さんの仰有るとおりにしたら、ひょっとして八っちゃんが助かるんではないかと思って、すぐ坐蒲団を取りに行ってきた。

お医者さんは、白^{ひげ}鬚の方ではない、^{きんぶち}金縁の眼がねをかけた方だった。その若いお医者さんが八っちゃんのお腹^{なか}をさすったり、手くびを握ったりしながら、心配そうな顔をしてお母さんと小さな声でお話をしていた。お医者さんの帰った時には、八っちゃんは泣きづかれにつかれてよく寝てしまった。

お母さんはそのそばに^{すわ}じっと坐っていた。八っちゃんは時々^こ怖い夢でも見ると見えて、急に泣き出したりした。

その晩は僕は婆やと寝た。そしてお母さんは八っちゃんのそばに寝なされた。婆やが時々起きて八っちゃんの方に行くので、^ゆ ^{せっかく}折角眠りかけた僕は幾度も眼をさました。八っちゃんがどんな^{さび}になったかと思うと、僕は本当に淋しく悲しかった。

時計が九つ打っても僕は寝られなかった。寝られないなあと思っている^{うち} ^つ中に、ふっと気が附いたらもう朝になっていた。いつの間に寝てしまったんだろう。

「兄さん眼がさめて」

そういうやさしい声が僕の^{みみもと}耳許でした。お母さんの声を聞くと僕の体はあたたかになる。僕は眼をぱっちり開いて^{うれ}嬉しくって、^ね思わず臥がえりをうって声のする方に向いた。そこにお母さんがちゃんと着がえをして、^{きれい} ^い頭を綺麗に結って、にこにことして僕を見詰めていらした。

「およろこび、八っちゃんがね、すっかりよくなってよ。夜中にお通じがあったから碁石が出て

来たのよ。……でも本当に怖いから、これから兄さんも碁石だけはおもちゃにしないで頂戴ね。兄さん……八っちゃんが悪かった時、兄さんは泣いていたのね。もう泣かないでもいいことになったのよ。今日こそあなたがたに一番すきなお菓子をおこあげましようね。さ、お起き」

　　とって僕の両脇に手を入れて、抱き起そうとなさった。僕はくすぐ ったくってたまらないから、大きな声を出してあははあははと笑った。

「八っちゃんが眼をさましますよ、そんな大きな声をするよ」

　　とってお母さんはちょっと真面目な顔をまじめ なさったが、すぐそのあとからにこにこして僕の寝間着を着かえさせて下さった。



碁石を呑んだ八っちゃん

平成二十三年三月二十八日 初版

著者 有島 武郎

発行所 藍岩堂